

「思考力・判断力・表現力等」と「技能」を関連付けて育む器楽活動

～器楽指導における「リズム伴奏を考える」事例をとおして～

内垣 美佳

本研究では、器楽曲「キリマンジャロ」（ウォルフ シュタイン・ウォルフガング ヤス作曲／橋本祥路編曲）を教材とし、曲想にふさわしいリズム伴奏を考える活動をとおして、曲想を生かして表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもって演奏する子どもの姿をめざした。さらに、子ども自らが必要と感じて、技能を身に付けていけるように、ゲストティーチャーとの連携、授業後の振り返りに重点を置いて研究を進めた。その結果、子ども自らが技能を高めようとする姿が見られ、思考力、判断力、表現力等の育成に効果をえられることが明らかになった。

キーワード：器楽曲「キリマンジャロ」、器楽指導、合奏、リズム伴奏、曲想、思いや意図

1. 研究の目的

本研究の目的は、ゲストティーチャーとの連携、授業後の振り返りを充実させながら、曲想にふさわしいリズム伴奏を考える活動をとおして、思いや意図をもって演奏できるようになることである。さらに、演奏する技能を自ら必要と感じて身に付けることができるようにする。

昨年度は、グループではなく学級全体で合奏することで課題を共有しながら、思いや意図をもって表現する子どもの姿をめざして実践を行った。合奏を楽しみ、意欲的に取り組む子どもの姿は見られたものの、課題として残ったのは、「音を揃える」「間違えずに演奏する」「テンポを速くする」等への意識が強く、強弱や演奏の仕方などに視点が向かなかったことである。そこで、今年度は、曲想を生かしながら表現の工夫をしたいと子どもたち自身が思えるような器楽の活動の在り方を探ろうと考えた。

また、これまでの自分の指導を振り返ってみても器楽の技能については、教師からの一方的な指導になりがちであった。新・小学校学習指導要領（平成29年6月）では、第5学年及び第6学年の器楽領域の事項ウについて、「技能の指導に当たっては、児童が表したい思いや意図をもち、それを実現するために、これらの技能を習得することの必要性を実感できるようにすることが大切である」と書かれている。本研究では、リズム伴奏を考える活動が思考力、判断力、表現力等を育み、さらに技能を習得することの必要性を実感することにつながるかを明らかにしたい。

2. 研究の方法

2. 1. リズム伴奏を考える

一般的に、器楽曲のリズム伴奏は楽譜に載っていて、どの楽器を使うかも決まっていることが多いが、本研

究では、あえてリズム伴奏を除き、旋律楽器のみで合奏させる。そうすることで、物足りなさを感じさせ、「自分達でリズム伴奏を考えたい」「もっと工夫して演奏したい」という思いを引き出す。リズム伴奏を考える活動が、思考力、判断力、表現力等の育成となり、さらに、技能の育成にもつながるように、題材を構成する。

リズム伴奏に使う打楽器の組み合わせを考えることで、楽器の音量のバランスについても意識が向くであろうと予想される。考えた思いや意図に合った音色や音量で演奏するには、技能が必要であるということに気付かせる。

2. 2. ゲストティーチャーとの連携

ゲストティーチャー（トヤマ楽器の三原豊氏）を迎え、リコーダーや打楽器の奏法について教えてもらう機会をつくる。特にリコーダーではタンギングや息の量を調節する等、多様な奏法によっていろいろな音色で奏でられることを感じ取らせる。すぐに出来るようになることは難しいが、多様な奏法を知っておくことで、思いや意図にふさわしい表現をする際の参考にしたり、どのような音色を出したいかという理想の音色を自分の中でもつことができたりすると考える。

2. 3. 振り返りの充実

これまでの実践を振り返ってみると、器楽の授業では教師が子どもたちの演奏を聴いて評価し、指導するという形になりがちである。自分にどんな力が身に付いているのか、これからどんな力を身に付けていきたいのか子どもたちが自己認識できるように、『「キリマンジャロ」振り返りシート』を作成し、活用する。書くテーマは教師が与え、授業の振り返りの時間に記入

させる。振り返りシートには、教師からのコメントを添えるようにし、どのようなところでつまづいているのか、子どもの技能をみとり、支援するための材料にもする。

3. 授業の実際

ここでは、平成29年10月（教育研究発表会）に行った題材『曲想を生かして演奏しよう～2つの「キリマンジャロ～」』（5年生）の実践について報告する。

3. 1. 題材設定の理由

器楽曲「キリマンジャロ」（ウォルフ シュタイン・ウォルフガング ヤス作曲）の曲想に合うリズム伴奏を考える活動をととして、どのように演奏するかについて思いや意図をもって演奏したり、必要と感じて技能を身に付けたりするようにする。

本題材の第一次では、「キリマンジャロ」と同じく自然をテーマにした曲である「～ミシシッピ組曲～『ハックルベリー・フィン』」（グローフェ作曲）を聴く。情景をイメージして鑑賞することの面白さ、そして強弱や音の重なり、速度が曲想と結び付いていることを理解させて合奏につなげる。

第二次の前半では、リコーダー、木琴、キーボード、グロッケンで楽器の音色や旋律の特徴を生かして「キリマンジャロ」を合奏する。演奏を繰り返す中で、曲全体の曲想を感じ取り、曲全体の構成や各声部の役割を理解し、楽曲とキリマンジャロの風景のイメージを重ねていく。

第二次の後半では、前半の学習で捉えた曲全体の構成、各声部の役割、旋律の特徴などを生かしながら、曲想にふさわしいリズム伴奏を考える。打楽器同士の音の響き、各声部と打楽器が合わさった時の全体の音の響きをどのような響きにしたいのかという思いをもつようにする。

打楽器を選んだ後、全ての楽器を合わせて合奏する。表したい思いや意図に合った音色や音量になるように、これまでの学びや経験を生かしながら自分なりに演奏の仕方を工夫したり、演奏の仕方をさらに身に付けようとしたりする子どもの姿が見られると考えている。「思考力、判断力、表現力等」「技能」を題材全体をととして関連付けて身に付けるようにする。

3. 2. 器楽曲「キリマンジャロ」について

リコーダーと鍵盤ハーモニカが「呼びかけとこたえ」のように掛け合う編曲となっている橋本祥路編曲の楽譜を使用する。A+A'+Bに序奏と間奏が付いた自由な形式でできている。今回は、音の重なり合う響きやフレーズを感じやすくするために、鍵盤ハーモニカは使用せず、リコーダーを中心とした合奏をする。曲全体をどのようなサウンドにしたいのかという思いに

よって選ぶ打楽器は異なってくるであろうと考える。

<主に使用した教材等>

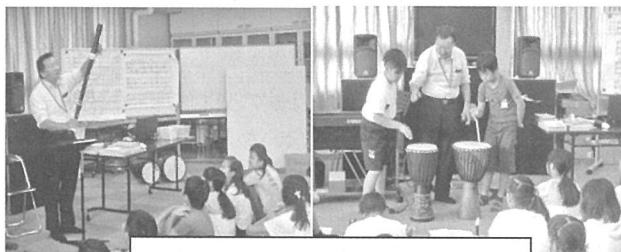
- ・「～ミシシッピ組曲～『ハックルベリー・フィン』」：「GROFE:Grand Canyon Suite」ボーンマス交響楽団
- ・DVD：「NHK グレートサミッツ世界の名峰⑥ キリマンジャロ」 小学館
- ・合奏用楽譜：平成27年度～教科書「小学校の音楽5」（教育芸術社）に掲載されていた鍵盤ハーモニカパートもリコーダーで演奏する。今回使用する楽器は、①リコーダー（2つのパートに分ける）、②キーボード、③バステナー木琴、④グロッケン、⑤ピアノである。本題材で①～⑤の楽器に加える打楽器の組み合わせを考える。

3. 3. 学習展開の実際

3. 3. 1. ゲストティーチャーを招いてリコーダーの多様な奏法を知る（第二次 第2時・第3時）

範唱を聴かせながら主な旋律と副次的な旋律であるリコーダーの練習を始めた。8分休符が入るシンコペーションのリズムが子どもたちにとって予想以上に難しかったようで、学習を進めるにつれて意欲が低下している様子であった。この状況でゲストティーチャーを招くことに不安はあったが、計画通りにトヤマ楽器の三原氏をゲストティーチャーとしてお迎えし、リコーダーの奏法について教えてもらうことにした。

まず、ソプラニーノからバスリコーダーまで、様々な種類のリコーダーを紹介しながら実際に演奏してくれた。吹いてくれるリコーダーの音色がきれいなことに子どもたちは驚いている様子であった。



（図1ゲストティーチャーを迎えて）

その後、前時に少し練習していた「キリマンジャロ」のはじめの部分を見せてもらった。「息はそんなに強くなくていいよ。今の半分ぐらいでいいよ」「タンギングには3種類あって、tu, du, ruがあるよ。このキリマンジャロはduぐらいがいいかもしれないね」など、息の使い方やサミングなどについて実際に吹きながら教えてくれた。

そして、さらにリズム伴奏となる簡単なリズムを3種類教えてくれて、ジャンベやカホン、カスタネット、タンブリン、すず、木琴やキーボードなども加えて演奏することになった。リコーダーの演奏の仕方や面白

さ、打楽器を加えて演奏する楽しさまで感じることで
できる授業であった。(図1)

3. 3. 2. 曲想にふさわしい打楽器の組み合わせを考える (第二次 第4時~第6時)

ゲストティーチャーと一緒に打楽器を加えて楽しく演奏した経験から、その後の授業では、「どんな打楽器を入れるの?」という意見が子どもたちから多く出された。そこで、「自分たちの『キリマンジャロ』に合う打楽器の組み合わせを工夫して演奏しよう」という課題を設定して、授業を展開していくことにした。まずは、学級を2つのグループに分け、リコーダーにキーボード、木琴、グロッケンを加えて楽器担当を決め、グループごとに合奏することにした。

各グループの音が合ってきたので、第5時の授業の終わりに、「どのような打楽器を入れたいと思っている?」と投げかけ、振り返りシートに個人の考えを書かせた。どうしてその打楽器にしようと思ったのか、理由も書かせた。子どもたちに人気のあった打楽器は次の通りである。

テーマ:「自分達のキリマンジャロに入れたい打楽器」
(意見が多かった打楽器)

- | | |
|------------|-----------|
| 1. カホン | 2. カスタネット |
| 3. ジャンベ | 4. 小太鼓 |
| 5. トライアングル | |

第6時では、①自分の意図や考えを言語で伝える→②実際に演奏してみる→③演奏してみてどうだったかを言語で伝える、という流れで授業を展開した。

はじめに、上記の1~5の打楽器を子どもたちに示し、これらの打楽器を選んだ理由を述べ合った。その際の授業記録が以下である。

いろは: トライアングルは鉄の楽器でリコーダーの音を打ち消さないからいいと思う。
まいか: 鉄はリコーダーの音を打ち消してしまうから、わたしは小太鼓がいいと思う。
あやか: カスタネットは音が小さいからリコーダーの音も打ち消さないし、拍も取れるからいいと思う。

次に、3人グループになり、意見が多かった5つの打楽器の中から、リズム伴奏として使う打楽器の組み合わせを考えさせた。リズム伴奏の基本となるリズムは3つ提示した。また、考える際のポイントとして次の3点を示した。①打楽器をいくつ使うか考える。(3つまで使っても良い) ②提示された3つのリズムの中からどのリズムを使うか考える。③旋律楽器と合わせた時に音の響きが合うかどうかイメージする。

3人グループになって考えた組み合わせには、【カスタネット・トライアングル】【カスタネット・トライアングル・ジャンベ】【カホン・トライアングル・小太鼓】などがあった。次の授業記録は、旋律楽器とカホン、トライアングル、小太鼓を実際に合わせて演奏し、聴いていたグループが感想を伝えているところである。

やまと: 木琴とグロッケンが聞こえなかった。

さりな: 小太鼓の音が大きくて、木琴の音が小さい。(小太鼓と木琴が) 同じリズムだからもっと小太鼓よりも小さい音の楽器にした方がいいと思う。

あいと: じゃあ、小太鼓をめっちゃ静かにしたらいいんじゃない? 小さくしたらいい。

教師: 今の話分かったかな? さりなさんが言ってくれたみたいに、同じリズムの場合、はじめから音の大きさを考えて楽器を選ぶ方法と、あいとくんが言ってくれたみたいに、演奏の仕方を変えて音の大きさを変える方法の2つの方法があるということだね。

あいと: 3つの楽器の組み合わせはよかったよな。

3. 3. 3. 振り返りを充実し、自分の技能について自己認識させる

題材をとおして学びがつながっていくように、授業の終わりには必ず振り返りの時間を設けた。『「キリマンジャロ」振り返りシート』には、その授業の感想や、次時へのめあてなどを書かせた。(図2) 授業の内容によっては自分のことだけでなく友達のを聴いた感想や、どのような打楽器を入れたいかなどの自分の考えも書かせた。授業の内容によって、学んだことを学級全体で共有した方が良くと判断した時には、振り返りカードを書かせずに振り返りの感想を発表するように促した。

テーマ「はじめて合わせてみて」

わたしはリコーダー①で、イのははじめの所、リコーダー②やキーボードにまどわされてしまいました。
(中略)今日はスタックカートやのばす音に注意して吹いてみました。高い音をよく失敗したのでたくさん練習してがんばりたいです。

テーマ「最後の演奏をして」

はじめは全然できなくてあきらめかけていたリコーダーがミスをしなくなりました。
そして、何度練習してもできなかった高い音が最後にできるようになってうれしかったです。

テーマ「はじめて合わせてみて」

最初の所はリズムは合っていたけど、パート①のリコーダーがどんどん速くなっていった、リズムが合ってなくて違和感がありました。

テーマ「最後の演奏をして」

最初のときよりステップアップしたと思います。長い間協力して合わせた曲は最後にいいものになったなと思いました。

図2 振り返りシートへの記入例

4. 授業の考察

- ①ゲストティーチャーに来てもらうまでは、リコーダーを演奏する意欲が低下していた。しかし、ゲストティーチャーに来てもらってから、集中してリコーダーの練習に取り組む子どもの姿が見られた。「だいたい出来るようになってきたけど、三原先生にはまだ敵わないなあ」という声もきこえ、ゲストティーチャーのリコーダーの音色を意識していることも窺えた。計画していなかったが、本題材の最後の授業に再びゲストティーチャーの三原氏が来てくれることになり、「キリマンジャロ」の合奏を聴いてもらう機会に恵まれた。三原氏も「こんなにリコーダーの音がきれいになるとは思っていなかった」と大変驚いていた。ゲストティーチャー招聘によって、子どもたちが自らきれいな音色を求めて技能を高めることに繋がったと考えられる。
- ②2つのグループに分かれて互いに演奏を聴き、感想を述べ合うことで、客観的な友達の意見も取り入れながら打楽器の組み合わせについて考えることができていた。さらに、全体のバランスを考えて演奏するためには、小さい音の楽器を選ぶことも一つの方法であるが、その演奏にふさわしい打楽器の音色や音量で演奏する技能が必要であるということを捉えることができていた子どももいた。また、題材のはじめは、積極的に打楽器を加えて演奏したいと考えていた子どもたちであったが、授業が進むにつれて、「打楽器は小さい音でいいのではないか」という考えに変わっていった。授業記録からも分かるように、「リコーダーの音を消したくない」という意識が強くなったようである。ゲストティーチャーにリコーダーを教えてもらい、難しいと思っていたリコーダーパートをきれいに吹けるようになったことへの喜びが、「リコーダーの音を大切にしたい」という考えに影響していると考えられる。
- ③合奏をすると楽器の片付け等に時間がかかってしまい、毎時間振り返りの時間を設けるのが難しかった。しかし、振り返りをする中で、子ども自身が見通しをもって活動に取り組むことができていた。また、図2にあるように技能の高まりを自分で実感している子どもが多くいた。振り返りシートは1枚のシートでできている。そのため、授業のはじめに課題を設定する時、シートを見直すことで前時の自分の考えを思い出している子どもがいた。また、「こんなところが困っている」など、振り返りシートに自分のつまづきを書いている子どもには、アドバイスを書いたり、次の授業で支援したりすることができた。

5. 成果と課題

5. 1. 成果

(ア) 題材のはじめの段階でゲストティーチャーを招聘したことで、リコーダーを演奏することへの意欲を高めることができ、題材をとおして技能を少しずつ高めていくことができた。特に、はじめは息の量が多かったが、息の使い方を上手にコントロールできるようになった。タブレットに録画した子どもたちの演奏からもきれいな音色になってきたことがわかる。ゲストティーチャー招聘は、理想の音色を求めて自ら技能を高めていくことに効果的であった。

(イ) 打楽器の組み合わせを考えることで、全体の響きを考えながら「このように演奏したい」という思いや意図をもって表現の工夫をすることができた。また、それと同時に全体のバランスを考えて演奏する技能面についても意識を向けることができた。題材のおわりには、子どもたちから「学年でキリマンジャロ発表会をしたい」という意見が出た。実行委員会が結成され、5年A組・B組・C組・F組の4クラス合同の発表会を行い、それぞれの学級で決めた打楽器を使って合奏をした。発表会後に書かせた感想には、自分の学級と他の学級の演奏を比べ、それぞれの良さや、達成感、喜びが書かれていた。予想をはるかに大きく超えて、「思考力・判断力・表現力」を高めることができたと言える。

(ウ) リコーダーや打楽器の奏法について振り返りシートに書いている子どもが多く見られた。特に打楽器を加える段階になってからは、強弱を付けようとしたり、全体のバランスを考えて奏法について考えたりしていることが窺えた。また、振り返りシートは、形成的評価の材料にもなった。

5. 2. 課題

振り返りの充実が技能の育成に効果的であるという成果は見られたものの、時間の制約がある中で振り返りを充実させることの難しさを感じた。また、技能を高めていくには楽器にたくさん触れる時間が必要であり、実際には計画していた時数よりも多くなってしまった。今後は、限られた時間の中でどのようにして確実に子どもたちに力を身に付けさせることができるのか考えていきたい。

参考文献

- ・柳生力(1978)「学級におけるリコーダー指導の研究」音楽之友社
- ・鹿毛雅治(2007)「子どもの姿に学ぶ教師」教育出版
- ・眞鍋なな子(2015)「子どもが輝く歌の授業」音楽の友社